

## 原 著

岩手医科大学歯学部付属病院第2口腔外科の  
最近3年間における入院患者の統計的  
観察

沼田 与志晴 佐々木 正道 小川 光一  
佐藤 憲太郎 松本 断 小島 誠  
関 重道 関山 三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座\* (主任：関山三郎教授)

[受付：1978年1月23日]

**抄録：**昭和50年4月1日から、昭和53年3月31日までの3年間に岩手医科大学歯学部付属病院第2口腔外科に入院加療を要した患者476名について統計的観察を行なった。年度別入院患者数は50年度が最も多く、1年間平均入院患者数は159名であった。月別入院患者数はほぼ一定で、1カ月間平均入院患者数は13名であった。年齢別では30歳代が最も多く、性別では男性が女性をやや上廻っていた。診断別分類では炎症23.1%が最も多く、嚢胞17.9%、腫瘍14.9%、奇形14.1%、外傷13.6%の順であった。1症例平均入院日数は39.5日間であった。炎症は非特異性炎、歯性感染が多く、嚢胞は術後性上顎嚢胞が半数以上を占め、良性腫瘍は血管腫、悪性腫瘍は上顎癌、奇形は唇顎口蓋裂、外傷は下顎骨々折がそれぞれ最も多くみられた。患者は岩手県内外いたるところから来科入院しており、歯科医院からの紹介が多かった。他科への依頼、兼科数は241回にもおよんでいた。転帰は軽快退院例がほとんどであり、死亡例はすべて悪性腫瘍の症例であった。その剖検率は58.3%であった。

## 結 言

近年歯学教育の発展、充実と、社会保険制度の拡充にともない歯学部付属病院を受診する患者が漸増し、その診療内容は多岐にわたってきている。さらに、地域社会への医学および公衆衛生思想の浸透、歯科医学に対する社会変化とともに、これら歯学部付属病院を受診する患者の実態も変わってきている。岩手医科大学歯学

部は昭和40年4月に開設され同時に口腔外科も設置された。その後、昭和48年4月には講座制施行により第2口腔外科が発足している。その間、歯学部口腔外科の診療内容は外来診療が主体となっていたが、大学病院として紹介されて受診してくる患者も少なくなく入院加療を要する患者もかなりの数にわたってきた。

今回、われわれは最近3年間における岩手医科大学歯学部付属病院第2口腔外科受診患者の

Statistical observations of in-patients at the Dental Hospital of Oral Surgery II of Iwate Medical University in recent three years

Yoshiharu NUMATA, Masamichi SASAKI, Koichi OGAWA, Kentaro SATO, Dan MATSUMOTO, Makoto KOJIMA, Shigemichi SEKI and Saburo SEKIYAMA. (Department of Oral Surgery II, Iwate Medical University School of Dentistry, Morioka 020)

\*岩手県盛岡市中央通1丁目3-27(千020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 4 : 12-19, 1979

実態を把握するために、当科新来患者 5,527名中、入院加療を要した 476名について統計的観察を行なったのでその概要を報告する。

**対象および観察事項**

対象症例は昭和50年4月1日から、昭和53年3月31日までの3年間に岩手医科大学歯学部付属病院第2口腔外科に入院加療をうけた476名で、その数は同期間における外来新来患者総数5,527名に対して8.7%であった。観察はつぎのような項目で行なった。

1. 年度別、月別の入院患者数
2. 年齢別、性別の入院患者数
3. 診断別による症例の分類
4. 主な疾患の年齢別、性別症例数とその患者の入院日数
5. 各疾患項目別のうちわけ
6. 患者の地域分布と来院経路
7. 他科への依頼、兼科の頻度
8. 転帰、その他

なお、繰り返し入院した場合は各回毎に1症例とした。

**成 績**

1. 年度別、月別の入院患者数

入院患者 476名についての年度別入院患者数は、51年度が176名と最も多く3年間総数の37.0%であった。1年間平均入院患者数は159名であった。外来新来患者数に対する入院患者数は50年度が10.4%と最も多く平均8.7%であった。外来患者数は年々増加しているが、外来患者数に対する入院患者数の割合は逆に減少傾向を示し、52年度が132名(6.7%)と少なくなっている(表1)。

表1 年度別外来、入院患者数

	外 来	入 院 (%)
50年度	1608	168 (10.4%)
51年度	1949	176 (9.0%)
52年度	1970	132 (6.7%)
計	5527	476 (8.7%)

表2 月別入院患者数

	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
50年度	10	14	14	18	14	14	18	14	13	16	11	12
51年度	14	12	15	17	16	14	12	20	11	16	14	15
52年度	13	14	12	13	8	7	12	12	7	10	11	13
計	37	40	41	48	38	35	42	46	31	42	36	40

表3 年齢別症例数

年 齢	症 例 数 (%)
5歳未満	69 (14.5)
5歳以上	31 (6.5)
10歳代	47 (9.9)
20歳代	77 (16.2)
30歳代	82 (17.2)
40歳代	69 (14.5)
50歳代	44 (9.2)
60歳代	31 (6.5)
70歳代	16 (3.4)
80歳以上	10 (2.1)
計	476 (100.0)

月別入院患者数はほぼ平均化しており、1カ月間平均13名が新たに入院している。1カ月間で新来入院患者数の最高は51年11月の20名、最低は52年9月と12月の7名であった(表2)。

2. 年齢別、性別の入院患者数

年齢別では30歳代が82名(17.2%)と最も多く、ついで20歳代77名(16.2%)、5歳未満、40歳代の各69名(各14.5%)の順に多く、逆に少ない年代としては80歳以上、70歳代の高年齢層であった。最低年齢は3カ月の乳児(唇顎口蓋裂例)、最高年齢は90歳の女性(良性腫瘍例)であった(表3)。

入院患者の性別では男性264名、女性212名で、男女比は1.2:1であった。

3. 診断別による症例の分類

これらを診断別に症例の分類をみると、炎症は111例(23.3%)と最も多く、ついで嚢胞85例(17.9%)、腫瘍71例(14.9%)、奇形67例(14.1%)、外傷65例(13.6%)の順に多く、この5疾患だけで全体の83.7%を占めていた。変形症の16例には、裂奇形における修正手術の

表4 診断別分類

	50年度	51年度	52年度	計 (%)
炎症	40	43	28	111 (23.3)
嚢胞	30	34	21	85 (17.9)
腫瘍	21	24	26	71 (14.9)
{ 良性	(11)	(12)	(5)	(28) (5.9)
{ 悪性	(10)	(12)	(21)	(43) (9.0)
奇形	27	18	22	67 (14.1)
外傷	24	18	23	65 (13.6)
変形症	4	3	9	16 (3.3)
齲歯	6	8	1	15 (3.1)
その他*	16	28	2	46 (9.7)

\*その他についての詳細は表13に記す。

みで入院した症例を含んでおり、齲歯15例については、薬物アレルギーの疑いとか、全身性疾患のため入院して抜歯を行なった症例が含まれている。その他の症例としては、抜歯後出血、唾石症、顎関節疾患などがみられた(表13)。

3年間における各疾患の推移は、52年度は50年度、51年度と比較して、炎症・嚢胞・良性腫瘍・齲歯・その他の症例が減少し、悪性腫瘍・変形症が増加している(表4)。なお、各症例の診断名はできるだけ正確を期して、単に外来初診時の臨床診断名でなく、病理検査、細菌検査やその疾患の経過によって得られる確定診断名を採用した。また重複診断例は、最も重要と思われるものを、一つとることとした。

4. 主な疾患の年齢別、性別分類と入院日数

おもなる疾患の年齢分布は、奇形は5歳未満に57例、85.0%と特に多く、変形症は10歳代、炎症・外傷は20歳代、嚢胞・良性腫瘍は30歳代、悪性腫瘍は60歳代がそれぞれ最多年令層を占めていた。また、奇形は10歳未満、悪性腫瘍は40歳以上にほとんど集中しているのに比べて、その他の疾患はほぼ全年齢層にわたっていた(表5)。

性別では外傷・変形症・奇形は男性が比較的多く、女性には良性腫瘍・悪性腫瘍・齲歯が多かった。

おもなる疾患の1症例当りの平均入院日数は悪性腫瘍の166.3日間が最も長く、ついで変形

表5 主な疾患の年齢別分布

	炎症	嚢胞	腫瘍	良性	悪性	奇形	外傷	変形	齲歯
5歳未満	2	2	1	1	0	57	7	1	0
5歳以上	3	3	5	5	0	9	6	2	2
10歳代	15	6	4	4	0	0	9	6	1
20歳代	31	10	5	4	1	1	16	4	3
30歳代	18	29	7	7	0	0	13	1	4
40歳代	22	20	12	4	8	0	7	0	3
50歳代	11	11	10	1	9	0	4	1	1
60歳代	8	4	12	1	11	0	2	1	0
70歳代	1	0	8	0	8	0	1	0	1
80歳以上	0	0	7	1	6	0	0	0	0

表6 主な疾患の性別と平均入院日数

	性別		1症例平均 入院日数
	男	女	
炎症	59	52	19.6
嚢胞	46	39	28.6
腫瘍	33	38	112.2
{ 良性	(13)	(15)	(34.9)
{ 悪性	(20)	(23)	(166.3)
奇形	40	27	26.1
外傷	51	14	43.2
変形症	14	2	43.4
齲歯	4	11	17.6

症・外傷の43日間、良性腫瘍・嚢胞の30日前後、炎症の19.6日間、齲歯17.6日間の順であった(表6)。なお、すべての症例からみた1症例当りの平均入院日数は39.5日間であり、そのうち最短入院日数は義歯性線維腫の2日間、最長入院日数は悪性腫瘍の353日間であった。

5. 各疾患項目別のうちわけ

I 炎症

炎症111例については、非特異性炎107例(96.4%)が、そのほとんどを占め、そのうち歯性感染によると思われるものが99例(89.2%)も占めていた。一方、特異性炎は非常に少なくカンジタ症2例、放線菌症、結核の各1例の計4例であった。非歯性感染としては唾液腺炎、口内炎、帯状ヘルペス、放射線性骨髄炎などがみられた。なお、感染経路の明らかでないものが1例みられた(表7)。

表7 炎 症

感染経路	特異性炎	非特異性炎	計
歯性感染	0	99	99
非歯性感染	3	8	11
不明	1	0	1
計	4	107	111

表8 囊 胞

	歯 原 性	非 歯 原 性	計
顎骨内	歯根嚢胞 14	術後性上顎嚢胞 48	77
	濾胞性嚢胞 6	鼻口蓋嚢胞 2	
	その他 4	その他 3	
軟組織		鼻齒槽嚢胞 2	8
		その他 6	
計	24	61	

II 嚢 胞

嚢胞85例については、顎骨嚢胞77例(90.6%)が軟組織に発生した嚢胞よりかなり多く、しかも非歯原性嚢胞61例(71.8%)が歯原性嚢胞より多くみられた。最も多かったものは術後性上顎嚢胞の48例で、59.5%と半数以上を占め、ついで歯根嚢胞14例、濾胞性嚢胞6例であった。その他の症例としては、歯原性角化嚢胞、球状上顎嚢胞、脈留性骨嚢胞、ガマ腫などがみられた(表8)。部位別では、上顎骨のものが67例(78.8%)と多く、下顎骨のものが11例(12.9%)と少なかった。

III 腫 瘍

腫瘍71例については良性腫瘍28例(39.4%)に対して、悪性腫瘍43例(60.6%)と後者が多くみられた。

良性腫瘍28例では、歯原性8例と非歯原性20例とに分類され、最も多くみられたものは血管腫9例、32.1%で、ついでエナメル上皮腫6例、多形性腺腫、非歯原性線維腫の各4例で、その他としては骨腫などがみられた(表9)。悪性腫瘍43例では、部位別分類で上顎癌17例、40.5%と最も多く、そのすべてが上顎洞癌であった。つぎに下顎癌8例、舌癌7例、口底癌6例の順にみられ、その他としては悪性リンパ

表9 良 性 腫 瘍

歯 原 性	非 歯 原 性
エナメル上皮腫 6	血 管 腫 9
歯原性線維腫 2	多形性腺腫 4
	線 維 腫 4
	そ の 他 3

表10 悪 性 腫 瘍

種 類	例 数
上 顎 癌	17
下 顎 癌	8
舌 癌	7
口 底 癌	6
頬 粘 膜 癌	2
そ の 他	3

腫、白血病、多発性基底細胞母斑症候群の3例で全身におよぶものであった(表10)。組織学的には扁平上皮癌25例(59.5%)と最も多く、腺癌9例、粘表皮癌2例などがみられた。

IV 奇 形

奇形67例については、裂奇形53例(79.1%)、小帯異常13例(19.4%)でほとんどを占め、そのうち唇顎口蓋裂が23例、34.3%と最も多く、ついで口蓋裂19例、舌小帯強直症は13例みられた。裂奇形口唇の左右側別では右側11例、左側8例、両側15例と両側が最も多く、右側、左側の順に多くみられた(表11)。

V 外 傷

外傷65例については、軟組織のみの損傷7例(10.8%)、歯槽骨々折をも含めた顎骨々折58例(89.2%)に分けられる。顎骨々折の部位別では顎関節を除いた下顎骨々折38例、65.5%と

表11 奇 形

	右 側	左 側	両 側	計	
裂 奇 形	唇 裂	0	4	0	4
	唇 顎 裂	6	1	0	7
	唇顎口蓋裂	5	3	15	23
	口 蓋 裂	19			
舌小帯強直症	13				
先天性下口唇嚢	1				

表12 骨 折

	右側	左側	両側	中央
上顎	1	2	1	1 (1)
下顎	13	14	4	4 (3)
上下顎	1	4	0	0 (1)
顎関節	7	1	0	

表13 表4でその他の疾患に含まれている症例の内訳

診 断 名	例 数
抜歯後出血	7
唾石症	6
顎関節疾患	6
神経痛	4
埋伏歯	3
エプーリス	3
義歯性線維腫	3
洞口腔瘻	3
褥瘡性潰瘍	2
白斑症	2
その他	7

最も多く、ついで顎関節骨折8例が多くみられた。左右側別では上下顎とも左側がやや多くみられたが、顎関節は右側が大部分であった。なお、表12の括弧内は歯槽骨々折を示している。軟組織のみの損傷としては、電撃症、舌咬傷、口唇裂傷などであった(表12)。

VI 変形症、齶歯、その他

16例みられた変形症のうちわけは口唇形成術後の瘢痕9例、エナメル上皮腫などの摘出術後の下顎欠損症4例、電撃症などの後遺症としての外傷性瘢痕拘縮2例などがみられた。

15例みられた齶歯のうちわけは局所麻酔剤、抗生物質などの薬物アレルギーの疑い4例、小児麻痺、心身症、心臓疾患、パーキンソン症候群などの全身性疾患のため入院して抜歯を行ったもの11例がみられた。

表13のその他の疾患46例のうちわけは、抜歯後出血、出血性素因あるいはその疑い7例、唾石症6例、習慣性脱臼などの顎関節疾患6例、三叉神経痛4例などがみられた。なお、表13のその他は各1疾患ずつのものであった(表13)。

表14 現 住 所

	岩 手 県 内				県 外
	盛岡市	盛岡近郊	市	町 村	
50年度	33	26	40	30	39
51年度	39	27	47	38	25
52年度	23	14	38	20	37
計	95	67	125	88	101

6. 患者の地域分布と来院経路

入院患者の地域別分布は患者の現住所で表わし、盛岡市内、盛岡市中心より約20 km 以内の盛岡市近郊、その他の県内の市と町村、そして岩手県外とに分類をした。患者は岩手県内外に広く分布していた。秋田県、青森県、宮城県などの県外からの来科入院 101名、21.2%と比較的多く、盛岡市内20.0%より多かった(表14)。

入院患者の来院経路は紹介をうけて、来科入院したものと、直接当科を訪れ入院となったものとに分けられ、紹介されて受診入院となった患者は252名で全体の52.9%におよんでいた。紹介された経路は一般歯科医院からの紹介 125名(49.4%)、医院あるいは病院からの紹介84名、本学歯科からの紹介21名、本学医科からの紹介15名、ことばの教室、児童相談所や他大学からの紹介7名であった。

7. 他科への依頼、兼科の頻度

入院患者の本学医学部各科、歯学部他科への延べ依頼あるいは兼科数は 241回にもおよんでいた。そのうち医学部、特に小児科への依頼あるいは小児科との兼科が多くみられた。なお、依頼して兼科となったものは兼科に含めた(表15)。

8. 転帰、その他

転帰については軽快退院が 443名(93.1%)とほとんどであった。死亡12名(2.5%)はすべて悪性腫瘍であり、そのうち7名については剖検が施行された(剖検率58.3%)。治療中止は14名、転医は4名それぞれであった。

顎骨々折、急性炎症などで緊急入院したものは27名(5.7%)みられた。

表15 他科への依頼, 兼科の頻度

医 学 部	依 頼 兼 科
小 児 科	23 19
眼 科	25 1
第 二 内 科	22 1
整 形 外 科	15 1
耳 鼻 科	16 0
皮 膚 科	13 0
第 三 内 科	13 1
脳 神 經 外 科	12 4
第 一 内 科	12 2
そ の 他	32 3
計	183 32

  

歯 学 部	依 頼 兼 科
補 綴 科	18 0
保 存 科	6 0
矯 正 歯 科	2 0
計	26 0

考 察

一般に、歯科を受診する患者は大部分が外来通院下の処置で治療可能であるが、近年、口腔疾患全般にわたり地域民の認識向上、歯科教育、医療の発展、拡充さらには専門化にともない入院をして治療をうける機会も増している。その対象となる患者は、一般につぎのような症例である。手術侵襲が大きく全身麻酔下の手術のため術中、術後の全身管理を必要とし、外来にては手術不可能なもの、外来初診時すでに重症であり、飲食摂取など困難なもの、また、全身疾患を有して、他科との併診下に諸検査を施行して手術を要するもの、交通の便の悪い遠隔地より来院したものなどが挙げられる。今回、われわれは、最近3年間のそのような患者476名について統計観察を試みた。結果はできるだけ正確を期したが、一部病歴内容の不詳なものもみられ今後の反省としたい。なお、病棟については第2口腔外科常時使用の病床数は16床で、その他、他科との混合病床があり、平均20床ほどを使用している。

統計観察結果を各項目毎にその内容を考察すると、年度別推移では、52年度、外来患者が増加しているのに、入院患者は逆に減少している。これは炎症やその他の疾患症例のような入院期間の比較的短いものが減少し、悪性腫瘍のような長期間入院を必要とする症例がふえ、病床を長い間ふさいでいたためであろう。月別推移では、月別、季節的には入院患者数に大差がなかった。これは入院患者は一般に、外来通院患者のように患者の都合で治療を左右される点が少なく、病状の軽重に強く影響されやすいということと、病床数が限られているためであろうと考えている。

過去5年間の本学口腔外科の報告<sup>1)</sup>では、1年間平均入院患者数は150名前後、外来新患に対する割合は5.5%であり今回のわれわれの結果よりやや少なかった。年齢別分類では、5歳未満を除いて30歳代をピークに放物線を描いて、その前後の年齢の患者数が減少している。これは、炎症、嚢胞、外傷などの症例数の多いものが、30歳代前後に集中していたためである。性別分類では、外傷、奇形、変形症が男性に多かったため、女性の1.2倍となった。

診断別の分類で10%以上を占めていた上位5疾患は、表4のごとく各年度を通じて上位を占め、また他大学を比較しても<sup>2,6)</sup>、従来の本学口腔外科5年間の報告と比較しても<sup>1)</sup>その順番や各割合は異なるが概して同様に上位を占めていた。

各疾患ごとの特徴としては、炎症については52年度の入院患者数が減少していることと特異性炎が非常に少ないことであった。嚢胞については術後性上顎嚢胞が年平均16例とかなりの頻度を呈して、また他大学と比較しても<sup>2,6)</sup>比較的多く感じられた。良性腫瘍については外来処置では治療困難と思われた血管腫やエナメル上皮腫がやはり多くみられた。悪性腫瘍については60歳以上の女性に多く、癌腫がほとんどで特に上顎癌が多くみられた。悪性腫瘍の1症例平均入院日数は166.3日間と長く<sup>3)</sup>再入院も考慮するとさらに長期間にわたって入院

していると思われる。これは放射線療法、薬物療法が長期間にわたり、また手術侵襲が大きく術後長期間管理が必要なためと思われる。奇形については裂奇形の左右側別で両側：右側：左側は15：11：8であったが、唇顎口蓋裂の場合再入院による重複例も多く、必ずしも発生頻度と比例するとはいえない。外傷については顎関節も含んだ下顎骨の骨折が79.3%にもおよび、左右側別では上下顎とも左側が多かったが、顎関節ははからずも右側が大部分を占めていた。軟組織損傷はほとんどが顎骨々折に伴うものであったが、軟組織のみのものは小児やてんかん患者によるものであった。変形症は10歳代が多く、齲歯は短期間入院という特徴を示していた。

年度別の入院症例の変遷をみると齲蝕に継発したと思われる炎症や歯根嚢胞が徐々に減少しており、これは口腔疾患に対する地域住民の意識の向上、口腔衛生状態の改善とも考えらる。また紹介患者の増加は開業医と本学との関係の密接化、浸透化をうかがわせる。このように年度ごとに医学および公衆衛生思想の進歩と社会状況の変化にともない入院患者の実態も変わってきているものと思われる。

患者の地域別分布は、盛岡市と盛岡市近郊34.0%、その他の県内44.8%、県外21.2%となり、特に県外症例は奇形、悪性腫瘍が多くみら

れた。紹介は総入院患者の半数以上にもおよび、紹介状はないが受診を勧められたものも含めると、さらにたくさんの患者が紹介、助言により来科入院していると思われる。また、本学歯学部の特徴の一つとして挙げられ、かつ重要なことは、医学部付属病院が隣接しており、きわめて密接なる連携、協力が得られていることで、これは医学部各科への依頼、兼科例がかなりの数におよんでいることから明らかである。

転帰については、死亡12例はすべて悪性腫瘍であり、剖検率は58.3%であったが、今後の悪性腫瘍治療の指針を得るためにも、極めて重要なことであろう。途中治療中止例の原因は、多くは小児の奇形症例であり、術前に全身状態不良のため全身麻酔不可能な例や伝染性疾患罹患により、一時退院をよぎなくされたものであり、また、転医にみられるような家庭の事情によるものであった。

## ま と め

昭和50年4月1日から、昭和53年3月31日までの3年間に岩手医科大学歯学部付属病院第2口腔外科を受診し入院加療を要した476名について、統計的観察と共に若干の考察を加えた。

(尚、本論文の要旨は、昭和53年11月5日、岩手医科大学歯学会第4回総会において発表した。)

**Abstract** : Statiscal investigation was made of 476 patients who were admitted to the Department of Oral Surgery II, Iwate Medical University Hospital during the past three year from April 1, 1975 to March 31, 1978.

The results were as follows: Average hospitalized patients in a year in this department were 159 patients. Majority patients were at the age of thirty and male was slightly greater than female. Frequencies of main lesions were classified into five categories, inflammation (23.1%), cyst (17.9%), tumor (14.9%), malformation (14.1%) and trauma (13.6%). Some of other lesions were also encountered.

## 文 献

- 1) 藤岡幸雄, 大橋 靖, 関山三郎, 工藤啓吾, 小川邦明, 玉木功一, 本間隆義, 小笠原佑吉, 鈴木孝三, 青森修明, 中里紘一, 柳沢 融: 岩手医科大学歯学部口腔外科創設後5年間における入院患

- 者の臨床統計的観察, 口科誌, 20: 592-600, 1971.
- 2) 扇内秀樹, 鈴木悦雄, 中村嘉夫, 阿部広幸: 本学口腔外科における過去5年間の入院患者の臨床統計的観察, 東女医大誌, 45: 278-285, 1975.
- 3) 高北義彦, 皆葉寿樹, 須佐昭彦, 竹山隆芳: 最近8年間の入院患者の臨床統計的観察(会), 歯科

学報, 65 : 487, 1965.

- 4) 関山三郎, 茂木克俊, 戸塚盛雄, 北山善之進,  
榎本昭二, 加子竜一郎, 南雲正雄 : 1966年度1年  
間における歯科病棟口腔外科入院患者 654例の症  
例分析, 口科誌, 17 : 578-586, 1968.
- 5) 山口修平, 都 温彦 : 福岡大学病院歯科口腔外

科開設後3年3ヵ月間における入院患者の統計的  
観察, 福大医紀, 4 : 301-306, 1977.

- 6) 石川武憲, 渡辺義明, 森沢宣生, 田中昭裕,  
吉岡 济, 広瀬洋二, 服部千秋, 石川雅夫, 山本  
美朗, 角田豊作 : 城西歯科大学における入院患者  
の統計的観察, 城歯大紀要, 4 : 269-275, 1975.